

平成 30 年 6 月 22 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15H04110

研究課題名(和文) ユーラシアのなかの日本中世都市 その基盤的研究

研究課題名(英文) Japanese medieval cities in Eurasia

研究代表者

高橋 康夫 (TAKAHASHI, Yasuo)

京都大学・工学研究科・名誉教授

研究者番号：60026284

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,900,000円

研究成果の概要(和文)： 無囲郭・拠点散在・風景 を都市性とする海の「京都」=京都・平泉・首里は、都市壁・拠点集中・人工 都市が一般的な東アジア(ユーラシア)においては数少ない存在であるが、例外的ではない。それは日本・琉球の都市史において一般的なありようである。京都・平泉・首里などの無囲郭都市の安全保障は、一つには海や山などの自然地理的条件を都市壁に代わる防禦装置とみなす観念によって支えられていた。もう一つの基盤は、宗教・信仰(神仏など)によって国土や首都が守護されているという観念である。京都・平泉・首里は、いくつもの固有の都市性を備えた、ユーラシアのなかでも独自の都市類型と考えられる。

研究成果の概要(英文)： The "Kyoto" of the Sea, that is, Kyoto and Hiraizumi of Japan, and Shuri of Ryukyu presents the nature of the city of which does not have a city wall, and the nature and aspects of Landscape City. Kyoto, Hiraizumi and Shuri are one of the few in East Asia and Eurasia where the walled city is common. However, they are not exceptional presence. They are likely to be common in the urban history of Japan and the Ryukyus. The security of non-walled cities such as Kyoto, Hiraizumi and Shuri was supported by the idea that one considers natural geographical conditions such as the sea and the mountain as a defensive fortress instead of the city wall. Another basis of security was the idea that the national land and the capital city were guarded by religion or faith such as Shinto.

Kyoto, Hiraizumi and Shuri have many unique urbanities, and can be thought of as their own unique city types in the Eurasian medieval world.

研究分野：都市・建築史

キーワード：日本都市史 アジア都市史 ヨーロッパ都市史

1. 研究開始当初の背景

都市史においても、各国史の枠組を越え、東アジアはもちろんのこととして広くユーラシアを視点に据えて研究を進めなければならない研究段階に到達している。

日本の都市史研究の先進性と京都・奈良・鎌倉・平泉・博多および琉球の首里・那覇の研究を基盤として、ユーラシアの文明と文化の視点から都市の研究をさらに推進することは、少なくとも東アジア都市史研究に明確な道筋を提示することになり、研究の国際的な発展にとっても、また平泉や鎌倉などの文化遺産についての国際的理解を深めるためにも大いに有益と考えた。

2. 研究の目的

本研究は、東アジアはもとより南・西アジア、ヨーロッパを視野に含めた比較都市史的、文明・文化史的な立場から、ユーラシア都市史のなかに日本中世都市を定位することを目的とする。

第一に、ユーラシア大陸と海によって結ばれかつ隔てられた中世日本・古琉球の顕著な都市性として、無囲郭・拠点散在・風景都市を提起したい。第二に、ユーラシア中世都市に無囲郭・拠点散在・風景都市の事例を探索し、中世日本・古琉球と比較検討する。第三に、これらによって東アジア都城やヨーロッパ中世都市などの城壁都市を相対化しつつ、ユーラシア中世の都市の普遍性と多様性の一端を明らかにし、そのなかに中世日本・琉球の都市を位置づける。

3. 研究の方法

中世日本と古琉球の都市を基点とし、東アジアからユーラシアに及ぶ中世都市を視野において、文明・文化史的さらに比較都市史的な視点と方法を援用しつつ都市史学・建築史学の立場から、以下の4つの課題を中心に研究を実施する。

上記の課題を追究するため、2つの対比的な都市性（無囲郭・拠点散在・風景都市と都市壁・集中・人工都市）と、これらの都市性を規定する3つの関係性、すなわち A. 生活の安全との関係：都市を防禦し、人と物の流れを制御する都市壁の意義と象徴性、B. 国家・都市統治との関係：政治・行政・軍事・宗教の様態、都市機能の配置（集中と分散）、C. 自然との関係：自然の征服と共存、対立と補完、都市内の自然と人工、を視軸とすることが研究の方法的基盤となっている。金石文を含む文献史料に加えて古地図・古絵図資料を十分に活用すること、データベースなどのツールを活用することはいうまでもない。

(1) 日本・琉球中世都市の都市性

無囲郭・拠点散在・風景都市の定式化

古代都城や戦国期城下町・寺内町、近世城下町に視野を広げて日本中世都市の都市性

を詳細に探究する作業を展開する。古代都城や戦国・近世城下町との関係の検討とその成果を踏まえ、さらに北の平泉と南の琉球の地政学的な状況を念頭において日本・琉球中世都市を無囲郭・拠点散在・風景都市として定式化する。

(2) 東アジア中世都市の都市性

都市壁・集中・人工都市と

無囲郭・拠点散在・風景都市の探究

東アジア都城研究を踏まえて、北宋の開封、南宋の臨安、元の大都、明の南京と北京、朝鮮のソウル・水原、琉球の首里・那覇、日本の京都・平泉・鎌倉を相互比較の対象として、それらの都市性を3つの関係性の視軸から探る。

(3) ユーラシア中世都市の都市性

普遍性と固有性の検証

南アジア・西アジア・ヨーロッパの都市性を都市壁・集中・人工都市と考定する作業、無囲郭都市や拠点散在都市、風景都市と捉えるべき都市の事例を把握する作業を実施するが、3つの関係性の視軸に加えて歴史性・地域性を重視する。

(4) ユーラシアのなかの日本中世都市

普遍性と固有性の検証、日本中世都市の定位

無囲郭・拠点散在・風景都市の普遍性と固有性を、アジア・ヨーロッパ中世都市との文明・文化史的、比較都市史的な検討を通して明らかにするとともに、都市壁・集中・人工都市を相対化する作業を実施する。そしてユーラシア中世世界のなかに無囲郭・拠点散在・風景都市、また日本・琉球中世都市を位置づけ、中世都市の普遍性と固有性、ひいてはその多様性を解明するための作業仮説を構築する。

あわせて、研究会と現地視察調査を実施し、発表、討論、情報交換および実地確認による研究の進化・深化そして成果の共有を図る。

4. 研究成果

本研究の基盤として3つの関係性の視軸の意義を検討しつつ、日本・琉球、東アジア、ユーラシアの中世都市の都市性を風景都市あるいは人工都市とし、そのなかに日本と琉球の中世都市、とくに京都・平泉・首里を位置付けた研究成果の一端を、まず4つの研究課題に即して示す。

(1) 日本・琉球中世都市の都市性

無囲郭・拠点散在・風景都市の定式化

古代においてもアジアの都城は規模が大きく人口が多いという特徴があり、それは中世、さらに現代にも受け継がれる（基本的な都市性）。

琉球を統一した第一尚氏王朝の尚巴志は首都として首里を整備する一方、1425年、波上に替わる港湾都市「那覇」を建設した。琉球王国の外交・交易を支えるさまざまな港湾機能を実質的に担ったのは、「那覇」とその後背地 波上や久米村、周縁の漁村など

であった(拠点散在)。「那覇」には禅宗・真言宗の寺院、媽祖(天妃・天后)の廟、道教の廟、神社(熊野ほか)、御嶽などがあり、宗教・信仰の国際性が際立っているのに対し、首里には王国・王権に深く関わる御嶽と禅宗寺院がある(都市と宗教・信仰、聖地)。

琉球においては大規模な城郭首里城が出現したが、これに比べると、日本における武家拠点室町殿の防御機能は無いも同然であった。京都も首里も都市壁を築かないこと、内乱を統一した軍事政権であることは共通するが、しかし王権や拠点の安全保障のありかたには大きなちがいがあがる(首里はいわば近世を先取り)。

京都・首里・平泉 海の「京都」

は、都城の系譜を引くこと、国際的な宗教である仏教の受容と展開、仏教思想と寺院の都市への組み込み、宗教都市、軍事政権都市といったような点で、東アジア中世都市の普遍性を備えている。

(2) 東アジア中世都市の都市性

都市壁・集中・人工都市 と

無囲郭・拠点散在・風景都市 の探究

中世中国・朝鮮の都市性を 囲郭都市

とするのは現代にも受け継がれている都市壁へのこだわりから自明ともいえる。

中国都城の計画・建設にあたって、まず王朝の宗廟を建設することから始まったこと、後に天壇が宗廟に代わって重要な意義をもったことなどの事例を挙げるまでもなく、古代・中世において王権と首都の様態

生活の安全・国家・都市統治・自然の諸相 が、宗教・信仰、王陵のありようと深く関わっていたことが重要である。

(3) ユーラシア中世都市の都市性

普遍性と固有性の検証

無囲郭都市や拠点散在都市、風景都市と捉えるべきユーラシア中世都市の探索作業は困難であった。ユーラシアではその地理的環境・地政学的条件のもと、都市と都市壁は安全保障(都市の防禦、人と物の流れの制御)のため必然的に不可分であり、拠点集中・人工都市となる(普遍性)。

都市壁は都市の象徴である(普遍性)。東アジアでは都市を防御する壁を意味する「城」を付した都市名、長安城・洛陽城などが用いられた(これは琉球のグスクを検討するに際し、一つの立脚点となった)。

南アジア・西アジア・ヨーロッパなどのユーラシア中世王権もまた、京(首都・王都) 国土、世界宗教(仏教・儒教) 民俗信仰、王陵、宗廟と不可分の関係にあり、とくにユーラシア中世の首都・王都の形態と構造は、宗教や信仰、王陵との根深い関係性を抜きにしては考えられない。ユーラシア世界におけるそうした都市性は概して前近代社会の特性とも言うことができよう(普遍性)。

世界宗教や固有信仰が首都・王都の形態と構造にどのような関係をもったのかに注目し検討した成果については後述する(研

究成果報告書)。

(4) ユーラシアのなかの日本中世都市

普遍性と固有性の検証、日本中世都市の定位

無囲郭・拠点散在・風景 を都市性とする海の「京都」=京都・首里・平泉は、都市壁・拠点集中・人工 都市が一般的な東アジア(ユーラシア)においては数少ない存在であるが、例外的ではないし、またそれは日本・琉球の都市史において一般的なありようといつてよい。

京都・首里・平泉など、無囲郭都市の安全保障は、一つには海や山などの自然地理的条件を都市壁に代わる防禦装置とみなす観念によって支えられている(鎌倉もこうした事例とすることができる)。

無囲郭都市の安全保障を支えるもう一つの基盤は、宗教・信仰(神仏など)によって国土や首都が守護されているという観念(コスモロジー)である。

京都・首里・平泉は、いくつもの固有の都市性を備えた、ユーラシアのなかでも独自の都市類型と考えられる。

比較都市史的検討を通して 風景都市の普遍性と固有性を示し、ユーラシア中世世界のなかの 無囲郭・拠点散在・風景都市を、また日本・琉球の中世都市を位置付けることができたと考える。

(5) 研究の総括に関連して

京都・首里・平泉のコスモロジー

3つの視軸、4つの課題は相互に深く関連するものであり、そうした複合的な成果の一端を、無囲郭・拠点散在・風景都市 である中世日本の京都、平泉、琉球の首里などのコスモロジーとして提示した。すなわち平泉の「仏国土のコスモロジー」、京都の「中世顕密主義のコスモロジー」、首里の「太陽子と祖霊神のコスモロジー」である。

また、研究の進展過程でとくに3つの関係性のうちのA 生活の安全との関係:都市を防禦し、人と物の流れを制御する都市壁の意義と象徴性 に関連して、都市と宗教・信仰、さらに都市と葬制と王陵など、それぞれの関係性を重視、検討すべきことが判明した。こうした視点から研究成果の一部を取りまとめ、2018年3月に報告書『京都・平泉・首里 都市と宗教・信仰』(373頁)を刊行した。

(6) 『京都・平泉・首里 都市と宗教・信仰』

本報告書は、序章(1-12頁)と、第一部「平安京・京都と天皇陵 葬制の変遷と「天皇陵空間」」(15-96頁)、第二部「平泉と中尊寺金色堂 仏国土のコスモロジー」(99-153頁)、第三部「京都と法勝寺・相国寺 中世顕密主義のコスモロジー」(155-258頁)、第四部「首里と玉御殿 太陽子と祖霊神のコスモロジー」(261-366頁)から構成されている。なお、本報告書をこのように構成することができたこと自体が研究目的の一定の達成を示していると考えられる。

以下ではその構成別に成果の概要を示す。

(7) 序章 展望と課題と論点

「世界のなかのアジア古代都市」(山田邦和)を踏まえて、高橋康夫が「ユーラシア中世の王都・首都 巨大都市と世界都市」、「ユーラシア中世の海の「京都」 京都・首里・平泉」、「ユーラシア中世の王都・首都 宗教・信仰、王陵」を展望した。そしてこの展望を踏まえ、「ユーラシアのなかの日本中世都市」という全体の課題を念頭におきつつ、海の「京都」 京都・平泉・首里を事例として、王権と王都と国土(国土の中心)、それらと世界宗教(仏教・儒教)や固有の民俗信仰の関係、王権のコスモロジー、そして王陵の様態、王都と王陵との関係などを主たる論点とした。これをもってユーラシア中世においてある意味で特異な、しかし普遍性をも併せもつ京都・平泉・首里の都市性の一端を解明した。

皇帝や王、天皇、将軍などの葬法と陵墓の構造、また陵墓の造営の規範がそれぞれの時代・地域の王権や宗教・信仰、その靈魂観や死生観、終末観、来世観と深く関わって重要であることはいうまでもなく、本報告書でも「どのような墓をつくるか」ということを注視した。ユーラシア中世世界の王陵を概観し、南・中央・西南アジア、ヨーロッパでは集合墓が一般的で、個人墓はごく少数(個人崇拜)であるのに対し、東アジアでは個人墓が一般的で、集合墓は少数(平泉、琉球の首里・浦添)であった。

本報告書では王陵についてこれまでさほど重視されてこなかった「どこにつくるか」に着目した。すなわち首都・王都と王陵の立地、選地のありかた 都市の中心・郊外・遠隔地 をも、王権や宗教・信仰、その死生観や終末観・終末論と深く関わるものとして重視するのである。立地は、a.都市内 都市中心、王城(王宮)至近、王城(王宮)内、b.都市郊外、c.遠隔地などに類型化される。

東アジアの辺境に位置する京都・平泉・首里における宗教・信仰、とりわけ王陵の様態は、本論第一部～第四部で詳述したように、ユーラシア中世王権とその王都・首都のなかできわめて特異な性質を示している。

ここで簡潔に指摘するならば、平安京・京都を取り巻く「天皇陵空間」の存在、葬法の混在(火葬と土葬、遺骨・遺灰の散骨と安置(地上と地下))、奥州平泉の藤原氏三代の遺体(ミイラ)が安置される中尊寺金色堂と都市平泉の空間構造とのかわり、また古琉球の王陵である首里の玉陵は、固有信仰やそれに由来する葬墓制のありかた(風葬と洗骨、遺骨安置)をよく示すとともに、「王都」首里の成立と構造に大きなかわりをもっていること、などがあげられる。

(8) 第一部 平安京・京都と天皇陵、王陵

天皇陵は一貫して平安京・京都の都市域内に営まれることはなかった。それ以外の皇族墓や貴族墓については事情が異なっ

いて、都市の内部に存在した仏教寺院に埋葬された。

相国寺創建以降においては、室町幕府の足利将軍の墓および靈魂祭祀施設は、彼らの御所のすぐ近辺に営まれた。

(9) 第二部 平泉と中尊寺金色堂

平泉においては仏教・神祇信仰が重要な意味をもっていたが、なかでも阿弥陀信仰は突出している。都市空間としての平泉、さらに陸奥国の中心としての平泉を、阿弥陀信仰という仏教思想を切り口としてとらえた。

平泉では阿弥陀来迎をうけて極楽浄土へ往生する順次往生のプロセスが阿弥陀堂の造形として具現化されていた。中尊寺金色堂や無量光院阿弥陀堂など、平安時代後期の阿弥陀信仰がもつ多様な側面が、建築空間の造形として豊かに展開されていた。

平泉においては、阿弥陀信仰の都市空間、さらに国土への展開も重要である。陸奥国を南北に貫く幹線道路＝奥大道に阿弥陀の卒塔婆を立てたことによって、平泉への道は南から、北からいずれも阿弥陀の巡礼道となった。そしてその先、国の中心である中尊寺には大成就院という巨大な阿弥陀堂が建立された(「清衡の奥州統一の理念」)。

これに大長寿院の十界阿弥陀堂、そして金色堂の奥州藤原氏の墓所としての阿弥陀堂という意味をくわえるならば、清衡の平泉建設の理念をより深く理解することができる。奥大道はこうした大長寿院への巡礼道であり、国の万民を救済するという、清衡の宗教的主導権の象徴でもあった。

平泉では最大の建築である大長寿院によって阿弥陀信仰を掲げた。さらに清衡が阿弥陀如来のもとで眠る金色堂は、民の救済者である清衡自らが阿弥陀如来によって救済されたことを示し、清衡の宗教理念の実現を証明するといえる。

都市レベルで現れた平泉の宗教理念は、阿弥陀信仰だけでない。[加羅御所 無量光院阿弥陀堂 金鶏山経塚]という都市軸は、[阿弥陀堂＝極楽往生]から[経塚＝弥勒下生]へ、という当時の人びとの未来に向けての時間軸を表現している。金色堂に眠る奥州藤原氏三代は、弥勒下生のときを待つ。壮大な時間をこえた仏教的世界観が、平泉の都市空間に反映されている。

平泉には、両界曼荼羅を掲げた京とは異なった、阿弥陀信仰を中核とする仏教理念に基づく未来に向けての国土観が表れており、これこそが平泉の京に対する独自性であり、奥州藤原氏の思想的な特質といえる。

(10) 第三部 京都と法勝寺・相国寺

密教の根本的な世界観を表した両界曼荼羅に注目し、建築史学の独自の視点から、直接の信仰・礼拝の対象となっていた堂塔の空間に中世の信仰世界の実像を見いだした。さらに視野を都市や国土にまで広げ、聖俗を包括する中世のコスモロジー、中世顕密主義のコスモロジーを提示した。

京において護持僧は両界曼荼羅に基づく修法を修し、さらに王城鎮守の二十一社の神々を毎夜一社ずつ勧請し、神祇灌頂を授け、勧請神の本地呪を唱えることによって宮城、京を鎮護した。

京の南北方向、一条から九条までを八葉九尊に、東西方向、大宮から東京極までを胎蔵界曼荼羅を構成する十三大院にあてはめ、京の都市空間を胎蔵界曼荼羅として観想した。そして京中の人々を胎蔵界の諸尊として観想した。京の条坊街区は曼荼羅の器となり、そこに暮らす人々は曼荼羅の諸尊となる。護持僧作法において、京の都市空間は胎蔵界曼荼羅と重ねて捉えられた。

禁裏は[金剛界大日如来=天皇]を中心とする金剛界曼荼羅とみなされた。つまり京という都市空間は、[禁裏=金剛界]と[宮城街区=胎蔵界]からなる両界曼荼羅であり、それは[天皇=金剛界大日如来][上下人民=胎蔵界諸尊]からなる両部不二の曼荼羅と捉えられていた。

両界曼荼羅を基盤とした国家観が形成され、両界曼荼羅は都市空間をこえ、国土へと展開した。権門寺社は、両界曼荼羅を基盤に自らを中心として神仏が重層する国土観を形成した。日本の国土に鎮座する神々と両界曼荼羅の諸尊との本地垂迹関係が日本の国土と両界曼荼羅と結びつけた。

中世には多様かつ豊かな信仰世界が存在し、広く世俗社会に浸透していた。こうした信仰世界に、天皇や国民からなる国土をもあわせ、聖俗を包括する広大なコスモロジーが形成された。両界曼荼羅はそこに面的な構造を与えた。両界曼荼羅を基盤とした、神仏そして聖俗からなる重層の世界こそが、王権と権門寺社を中心とする中世顕密主義が描いたコスモロジーの一つの到達点であった。

国家、王権は思想的な拠り所を普遍的世界観である両界曼荼羅に求めた。そして、両界曼荼羅を基盤とした顕密・神仏さらには国家、国土をも包括するコスモロジー——中世顕密主義のコスモロジー——を形成し、そこに結びつくことによって自らの国家や王権、教団の正統性を主張した。

白河天皇が両界曼荼羅を国家のイデオロギーの核としたことにより、[大極殿=天皇=金剛界大日如来]と[法勝寺金堂=胎蔵界大日如来]からなる両界曼荼羅が、京都という都市空間に顕現した。[大極殿 二条大路 二条大路末 法勝寺金堂]は、首都京都における中世王権の復興を象徴する、まさに中世京都の都市軸であった。

(11) 第四部 首里と玉御殿(玉陵)

グスクの概念構造

グスクの語源・原義の研究について、グスクが聖域や集落、城館であることを同時に説明できなくてはならないことを指摘した上で、グスクのスクは、城や砦、屋敷、家、建物、土地などの「内と外を隔てるところ(囲い)」=ソコを語源とする。ソコは、おのず

から隔離・制御・防御などの機能を備えているとした。一方、グスクのキとは敵を防ぐために柵や垣、堀などで区切ったところなのであり、ついでその構築物、さらにこれらの構築物によって囲われたところ、砦や城の意として語義が展開した。グスクの語源は「キ(城・柵)+ソコ(壁・垣)」、その原義は「隔離と制御、とくに防御の囲い、それによって囲われたところ」と推定した。

グスク研究(論争)の道程、最新の研究を概観し、グスクの語源・原義を踏まえて、以下の見方を提示した。これまで半世紀をこえる活発な研究活動のなかで、グスクとは何かについて、城館説、聖域説、集落説の三つしか主張されなかったことは、次の重要な事実を示していると考えた。第一に、グスクの本質を示す典型が城郭グスクと聖域グスク、集落グスクであること、第二に、グスクの本質的な機能が、これら三つのグスクが象徴する軍事機能、信仰機能、生活・生業機能であること、第三に、これら三つのグスクそれぞれの実体・機能が密接な相互補完の関係のもとに存在していること、である。グスク論争はいまだ決着をみていないともいわれるが、すでに多大な成果をあげて決着していると評価すべきであろう。

グスクの実体・機能・構造を、聖と俗、隔離と防御、居住と非居住、日常と非日常などの視軸とともに整理し、グスクの概念構造として図化した。

首里玉御殿

玉御殿は、東アジア(ユーラシア)の陵墓のなかできわめて異例な立地である。琉球では伝統的に王陵を王城の直近に配置する。宗廟の崇元寺が王城さらに王都首里からも離れて立地することも留意すべきである。

陵墓である玉御殿が、王都首里の重要な構成要素として王城至近の正面に当たる地を占める。玉御殿は首里城守礼門近くにおいて、天界寺とともに都市軸である綾門大道の景観を形成するものとして造営された。

王陵と宗廟のこうした立地・選地を定めることになった宗教・信仰のありようは、これまで重要視されてこなかった。王陵と宗廟、とりわけ前者の解明は、王都首里の形成を探るうえで重要な視点となるものであり、ひいては中世都市の宗教性を理解することにつながるとした。

古琉球では浦添グスクの隣に極楽寺を、首里グスクの隣に円覚寺を置いたように、王城の至近に菩提寺を配置する。京都の室町殿と相国寺の関係に類似しているとみられる一方、明や朝鮮にはこうした関係はない。

玉御殿は琉球・沖縄における最初で最大の石造建築墓(破風墓)であり、琉球の最高級の建築であった首里城正殿をモデルとし、木造を石造に置き換えた。葬所と墓所を建築化して成立した玉御殿には、さらに廟所(祠堂)としての機能が加わった。

玉御殿は大型グスクである。玉御殿の

石牆や空間構成には明確に大型グスクとの共通点、「正殿 御庭」構造がある。この構造の基底には垣に囲まれた空間に中心建築と庭を配する伝統的な空間観念が潜む。広く波上権現などの神社や廟などにも同様の空間構造がみられるのは、こうした空間構造が普遍的な性質を持っているからであろう。

玉御殿は太陽子の聖域グスクである。玉御殿は、琉球国王を太陽神の末裔とする太陽子思想のもとで営まれた王陵グスクである。死後の生活を支える部屋や副葬品がないことが一つの特徴である。

玉御殿は祖霊神・祖先神の聖域グスクである。琉球固有の伝統的な祖霊信仰・祖先信仰に基づく墓廟であり、「玉」を祀る聖域グスクである。

玉御殿は宗廟である。琉球固有の伝統的な祖先信仰・祖霊信仰に基づく宗廟であるが、近世には清明節に儒教的な宗廟祭祀が行われるようになった。

首里玉御殿は、王家のたんなる墓ではなく、大型グスクと同じ空間構造をもった太陽子と祖霊神の聖域グスク、葬所と墓所と廟所の聖域グスク、そして宗廟であり、いくつもの思想・信仰、機能が重層した希有の王陵ということができる。

[城郭グスク = 首里城正殿 = 琉球王 = 太陽子] 綾門大道 [聖域グスク = 玉御殿 = 歴代琉球王 = 祖霊神] という都市軸は、弁財天女に守護された国土の中心にあって現在(未来)と過去を結ぶ時間軸でもある。

第四部「首里と玉御殿」全体の歴史的な基盤というべき太陽子と祖霊神のコスモロジー、古琉球の王権とコスモロジーを説明する図を作成した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2 件)

山田邦和、平安京の都市的変容 京・鎌倉時代における展開、条里制・古代都市研究、査読無、32号、1-18

山田邦和、陵墓研究の現状と陵墓公開運動、日本史研究、査読無、647号、2016、21-51

富島義幸、松川阿弥陀迎接像の造形とその特徴 平泉仏教文化圏における位置づけをめぐって、一関市博物館研究報告、査読無、巻30、2017、1-17

富島義幸、平安時代の阿弥陀信仰と密教、日本宗教文化史研究、査読無、21巻2号、2017、20-43

[学会発表](計 0 件)

[図書](計 4 件)

高橋康夫、京都大学学術出版会、『海の「京都」 日本琉球都市史研究』、2015、1150

高橋康夫他、奈良文化財研究所、『中世庭

園の研究 鎌倉・室町時代』、2016、224
高橋康夫「室町時代の将軍御所と環境文化」、46-53

桃崎有一郎・山田邦和他、文理閣、『室町政権の首府構想と京都』、2016、540

高橋康夫「室町期京都の空間構造と社会」、20-43、富島義幸「相国寺七重塔とその伽藍」、159-178、山田邦和「東山中世都市群の景観復元」、254-269

高橋康夫・富島義幸・山田邦和・伊ヶ崎鷹彦、科学研究費基盤(B)研究成果報告書、『京都・首里・平泉 都市と宗教・信仰』、2018、373

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 康夫 (TAKAHASHI Yasuo)
京都大学・大学院工学研究科・名誉教授
研究者番号：60026284

(2) 研究分担者

富島 義幸 (TOMISHIMA Yoshiyuki)
京都大学・大学院工学研究科・准教授
研究者番号：80319037

(3) 連携研究者

山田 邦和 (YAMADA Kunikazu)
同志社女子大学・現代社会学部・教授
研究者番号：30183685

(4) 研究協力者

伊ヶ崎 鷹彦 (IKAZAKI Takahiko)
花園大学・文学部・助手
研究者番号：
マシュー・スタブロス (Matthew Stavros)
シドニー大学・美術社会学部・准教授
研究者番号：